

# 障害のある児童生徒が自立と社会参加するために必要な資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントに関する研究 ～障害種の異なる特別支援学校の実践から～



千葉県総合教育センター

特別支援教育部

指導主事 深澤 祐子

指導主事 三橋 徹

研究指導主事 鈴木 淳一

研究指導主事 鈴木 郁夫

## 1 主題設定の理由

社会構造や雇用環境が急速に変化し、予測困難な時代を生きる上で必要な資質・能力を、児童生徒一人一人が身に付けるためには、教育課程の改善を図ることが重要である。また、児童生徒の障害の状況や学習上、生活上の困難さを踏まえ、学びの連続性の視点から、教科等横断的に組織した教育課程の在り方を示す必要がある。

特別支援学校においては、重複障害のある児童生徒も多数在籍しており、多様な教育的ニーズに応じた指導・支援の必要性がより強く求められている。

学習指導要領では、障害のある児童生徒が自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培うためには、一人一人の障害の状態等に応じたきめ細かな指導及び評価を、より一層充実させることが重要であり、さらに、教育課程に基づき、組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことの必要性についても示している。

これらのことを踏まえ、本研究では、特別支援学校で必要な資質・能力を育成するための教育課程の在り方について、カリキュラム・マネジメントの視点で研究を行った。

昨年度は県内（市立を含む）の特別支援学校41校の教育課程の内容について分析した。各校、障害の程度に応じて教育課程が編成されているが、研究協力員会議の意見交換において、個別の指導計画の作成に向けて、実態把握及び目標設定をどのように行うかということに多くの教員が難しさを感じていることが分かった。

個別の指導計画は、教育内容の質を向上させるための重要な基盤であることから、この課題の解決に向け、よりよい個別の指導計画を作成するための方法を検討し、実態把握から目標設定までに活用できる2種類のシートを開発した。

今年度は、この2種類のシートを用いて個別の指導計画を作成し、授業実践を行うことにより、カリキュラム・マネジメントの視点から各シートの有用性を明らかにした。

## 2 研究目標

特別支援学校に在籍する児童生徒一人一人に適した個別の指導計画の作成に役立つ、各教科等及び自立活動について指導目標等を検討するためのシートを含むツール

を開発及び改善し、これを活用した各校の取組を障害種ごとにまとめ、広報することにより、よりよいカリキュラム・マネジメントの充実に資する。

### 3 研究計画

年度	研究内容
平成30年度 (1年次)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○県内特別支援学校の現状と課題を把握する。</li> <li>○研究の具体的な方向性を検討する。</li> <li>○各教科等と自立活動の2つの視点から目標設定できるシートを開発する。</li> </ul>
令和元年度 (2年次)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各教科等と自立活動の2つの視点から目標設定できるシートの有用性を検証する。</li> <li>・各校において事例対象とする児童生徒を挙げ、各教科等と自立活動の2つの視点から目標設定できるシートを用いて、実態把握から目標設定を行う。</li> <li>・設定した目標に沿って、授業内容を検討し、授業を実践する。</li> <li>○開発した2種類のシートと共に各校の取組、またシートを使った効果について県総合教育センターのWebページへ掲載し、教員への周知を図る。</li> </ul>

### 4 研究組織

#### (1) 講師

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

総括研究員 吉川 知夫

#### (2) 調査研究協力員

県教育庁教育振興部特別支援教育課	指導主事	吉田 正巳 (平成30年度)
	指導主事	塩田 順子 (令和元年度)
県立千葉盲学校	教諭	東 あずさ (平成30年度)
	教諭	糸久 陽子 (令和元年度)
県立千葉聾学校	教諭	村山 昌也
県立仁戸名特別支援学校 (病弱)	主幹教諭	高橋 敬子
県立桜が丘特別支援学校 (肢体不自由)	教諭	島森 邦夫
県立銚子特別支援学校 (肢体不自由)	教諭	野口 克巳 (平成30年度)
	教諭	麻生 修平 (令和元年度)
県立野田特別支援学校 (知的障害)	教諭	大川木綿子 (平成30年度)
	教諭	内田 晋 (令和元年度)
県立特別支援学校流山高等学園 (知的障害)	教諭	佐藤 拓馬

#### (3) 調査研究協力員会議

ア 平成30年度 年4回開催

イ 令和元年度 年4回開催

## 5 研究内容

### (1) 平成30年度（1年次）

ア 学習指導要領の趣旨を踏まえ、障害のある児童生徒が自立と社会参加するために必要な資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントの視点を検討する。

・カリキュラム・マネジメントの充実のために必要な四つの側面を中心に、特別支援学校において必要な視点について研究する。



イ 県内特別支援学校の教育課程の現状を把握する。

・学校教育目標と各学部目標とのつながり、教育課程の分類、年間指導計画等について現状を把握する。

ウ 2種類の目標設定シートを開発する。

・各教科等の視点から目標設定ができるシート（以下、「各教科等チェックシート」という）を開発する。

・特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」に示された実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの「流れ図」を基に、経験の浅い教員も作成しやすい目標設定シート（以下、「自立活動フローシート」という）について検討する。

(ア) 各教科等チェックシート（図1）について

各教科等の教育内容は、児童生徒の発達の段階等に即して配列、実施するものであり、実際の指導の際には、小・中学校学習指導要領等の各教科等に示されている目標に照らし、児童生徒の学習状況が何学年相応かを把握する必要がある。本チェックシートは、当該学年の内容が適当か、下学年の内容が適当か、または特別支援学校学習指導要領に示された目標及び内容が適しているかどうかを、より効率的に、より視覚的に分かりやすく把握することを目的とし、開発したものである。

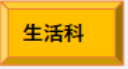


また、知的障害のある児童生徒については、生活を基盤として学習や生活の流れに即して学んでいくことが効果的であることから、日常生活の指導や生活単元学習、作業学習等の学習形態で指導を行っていることが多い。本シートを活用することで、日常生活の指導で取り扱う内容や、生活単元学習の各単元の中においても、各教科のどの内容について重点を置き指導を行っていくかを確認でき、教科との連携が図りやすくなる。

入力の際、経験の浅い教員も取り組みやすいように、各段階の構成や各教科等の目標及び内容等について選択・検討する際、特別支援学校学習指導要領（各教科編）にある一覧表をすぐに確認できるよう工夫した。

さらに、シートの記入・活用に際して、ヒントの提示も必要であると考え、使い方や学部ごとの記入例等を付け加えた。工夫した点を次頁に図示（一部抜粋）する。

このアイコンを選択すると、各教科の目標及び一覧表を閲覧できる。

知的障害のある児童生徒は、それぞれの教科について、1～3段階の中でどの学びが適切かを選択する。

教科等	内容	知的障害がある			知的障害がない						備考		
		小学部（段階）			小学校（学年）						具体的な指導内容	指導場面 教科・単元等	
		1	2	3	1	2	3	4	5	6			
生活 (特別支援学校) 	ア 基本的生活習慣 イ 安全 ウ 日課・予定 エ 遊び オ 人との関わり カ 役割 キ 手伝い・仕事 ク 金銭の扱い ク しまり ケ 社会の仕組みと公共施設 コ 生命・自然 ク ものの仕組みと働き												
国語 ※ (特)2段階 同観点 	知識及び技能 A 聞くこと・話すこと B 書くこと C 読むこと												
社会 (小学校3～6年)													
算数 	A 数と計算 B 図形 C 測定 D データの活用 (数学的活動)												
理科	A 物質・エネルギー												

特別支援学校の「生活」と小学校の「生活」は内容が異なる。小学部の「生活」では中学部の「理科」「社会」「職業・家庭」につながる内容も取り扱う。

教科の内容を示すことで、より細かな実態把握を行うことができる。

小・中学校学習指導要領に準じた内容を学ぶ児童生徒は、当該学年の学びが適切か、下学年の学びであれば、何学年下の学びが適切かを選択することができる。

各教科の内容の中で、今年度特に重点的に取り組みたい指導内容があれば記載し、指導場面についても示すことができる。

図1 各教科等チェックシート

(イ) 自立活動フローシート (図2) について

本シートは、特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」に示された「流れ図」を参考に作成し、改善を行っていくものである。

具体的には、児童生徒の将来の姿をイメージしながら、今年度重点的に指導する内容を設定するため、以下の3項目を追加した。【図2のA～C参照】

- A 「3年後に目指す姿」の項目の設定
- B 6区分27項目のシートへの明記（見える化・ビジュアル化）  
（学習指導要領での改善事項である自立活動の内容）
- C 指導内容への指導場面の項目の追加  
（どの場面で重点的に指導するのかを明記できる項目が必要であるため）

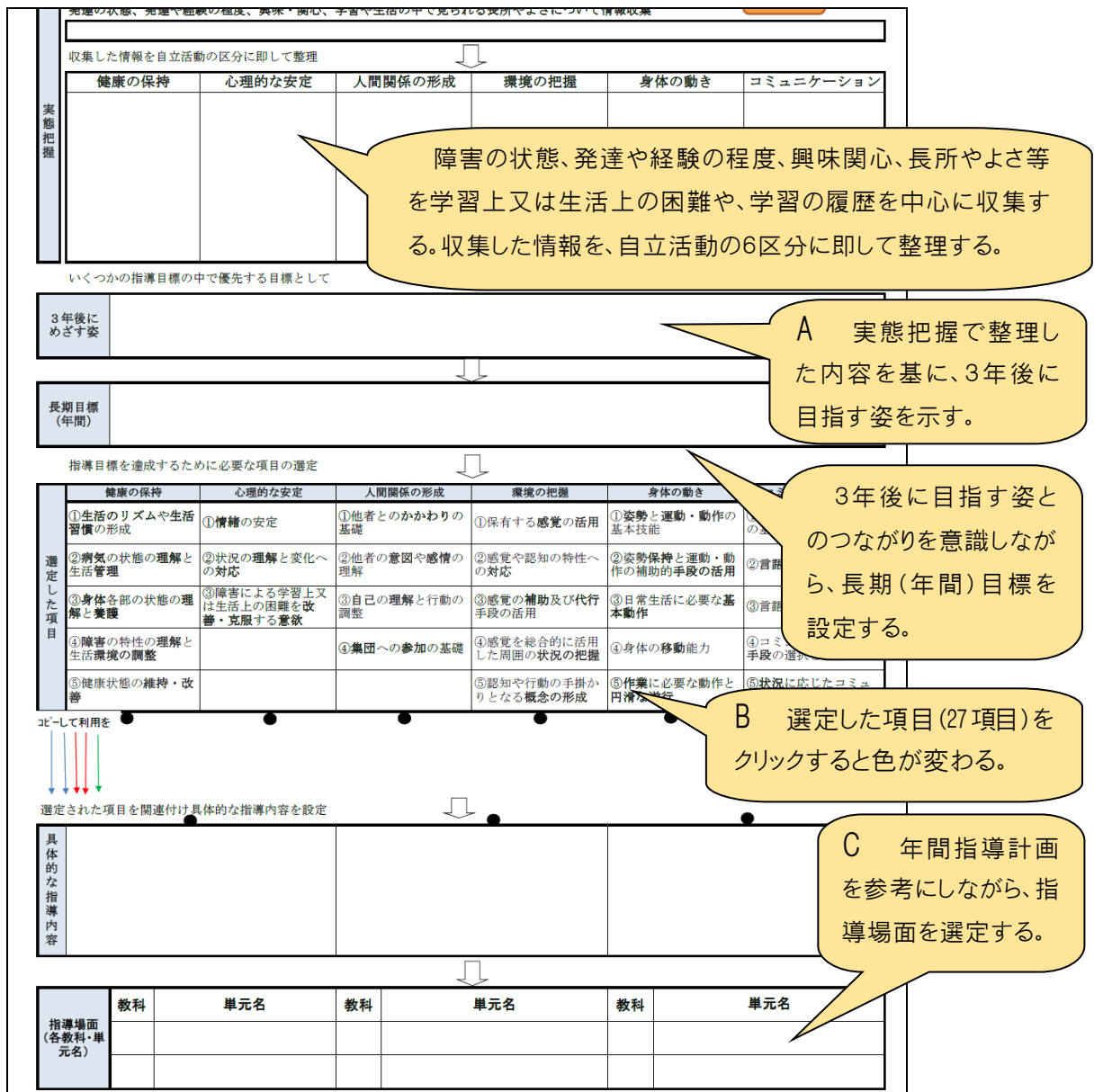


図2 自立活動フローシート

(2) 令和元年度(2年次)

- ア 各教科等と自立活動の2つの視点から目標設定できるシートの有用性を検証する。
- イ 開発した2種類のシート等とともに各校の取組、またシートを使った効果についてまとめる。
  - ・各校において事例対象となる児童生徒を1名から複数名選定し、各教科等チェックシート、自立活動フローシートを使って、改めて実態把握から目標設定を行い、児童生徒が在籍する学級・学習グループにおいて授業を行う。
- ウ 総合教育センターのWebページへ掲載し、教員への周知を図る。

実施した授業については次頁に示す(表1)。

表 1 授業実践一覧表

障害種	協力員所属校	事例対象児童生徒・授業実践教科等		
		学部	学年（教育課程等）	教科等
視覚障害	千葉盲学校	小	重複学級	自立活動
		中	普通学級（準ずる）	数学
聴覚障害	千葉聾学校	小	普通学級（準ずる）	国語
		小	普通学級（下学年）	国語
病弱	仁戸名特別支援学校	小	普通学級（準ずる）	家庭
		中	普通学級（準ずる）	国語
		高	重複学級	自立活動
肢体不自由	桜が丘特別支援学校	中	重複学級	自立活動
	銚子特別支援学校	小	重複学級	自立活動
知的障害	野田特別支援学校	小	普通学級	自立活動
	流山高等学園	高	普通学級	総合的な探究の時間

特別支援学校では児童生徒一人一人に対して、毎年、個別の指導計画を作成している。本研究では、2種類の目標設定シートの有用性を検証するため、今年度8月頃に各シートへの記入を行い、改めて実態を捉え直した。

シートの有用性を以下のポイントで検証した。

- ・各教科等については教科を学ぶ意義を捉え直すという今回の指導要領改訂に沿って、児童生徒の各教科等の段階を適切に把握できているか
- ・各教科等について具体的な指導内容について指導場면을意識できているか
- ・各教科等の段階を把握した上で学習指導案の目標設定につなげることができているか
- ・自立活動の視点から実態把握を行うことで、児童生徒の将来の姿を意識して長期目標を設定できているか
- ・自立活動6区分27項目を意識して具体的な指導内容から指導場面を設定できているか
- ・自立活動の視点からみられた具体的な配慮事項等を学習指導案に明記することができているか

## 6 研究のまとめ

### (1) シートの活用について

本研究では、各シートの開発だけでなく、各シートが個別の指導計画の作成に役立つか、またその目標等が、授業づくりにおいて活かされたか、学習指導案の単元観並びに単元目標に関連しているか等について検証を行った（図3）。併せて実際に各シートを、どのように一連の計画・実施・評価・改善のサイクルの中で活かしたかをまとめた（表2）。

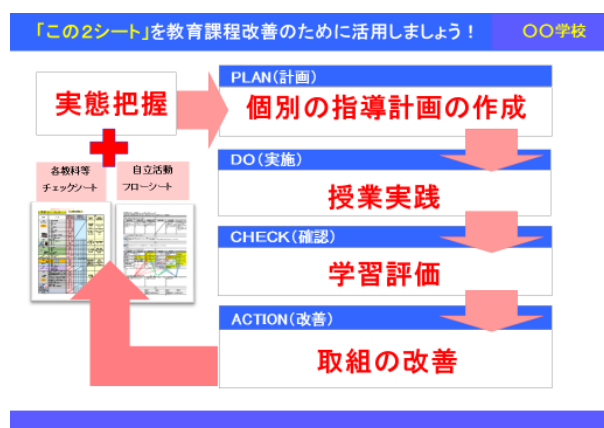


図3 研究全体図

表2 PDCAサイクル場面における両シートの活用

PLAN（計画）：個別の指導計画の作成	
課題	効果
○どうしてこの目標を設定したのか説明できなかった。 ○指導場面に個々の目標を当てはめるスタイルだった。	◎学習指導要領に準拠した目標に対する評価になったことで、目標設定に至るプロセスが明確になった。 ◎個々の実態から、具体的に取り組む内容、指導場面を設定することができた。
DO（実施）：授業実践	
課題	効果
○各教科では、発達段階に合わせた授業づくりが中心だった。 ○学習指導案作成時に会議を持ち、指導内容を検討していた。	◎学習指導案に示された各教科の段階における指導内容を明確にした授業づくりができた。 ◎検討時間が短縮され、教員間で指導内容の共通理解が深まった。
CHECK（評価）：学習評価	
課題	効果
○授業の振り返りと評価は、本時全体の内容に関することが中心に行われ、個々の目標に対する評価について、別の機会に検討していた。	◎2つのシートを基に、個々の目標の評価と授業全体の評価の一体化が容易になった。
ACTION（改善）：取組の改善	
課題	効果
○授業の振り返りと個々の評価は、別々に検討会を実施し、それぞれの担当教員間で検討していた。	◎2つのシートを用いることで、それぞれに関わる教員が同時に、授業内容の振り返りと見直し、児童生徒の評価及び次の目標について検討することができた。

これまで、各校では、一連の計画・実施・評価・改善のサイクルで授業実践を行っているが、実態把握において根拠を基にした目標にならなかつたり、授業実践後の話し合いの内容を次の単元や次年度の教育課程に活かして改善したりすることが難しいという現状があった。しかし、2つのシートを活用することで、上記のような様々な効果が見られた。

個別の指導計画を作成する前に2つのシートを作成するという事は、教員の負担が増えるような印象を受ける。確かに、2つのシートを実際に活用した教員の多くが、シートに入力するためにそれぞれ1時間程度かかり、記入した内容について見直し等を行うために、2日程度かけて熟考していた。しかし、今までも個別の指導計画の作成に向けて実態把握を行う時間は必要であり、2つのシートの作成が大きな負担増につながることはないと考える。逆にこの2つのシートを作成しておくことにより、個別の指導計画の作成並びに学習指導案の作成時間が短縮される事例も今回の実践研究で出てきている。

なお、実際に2つのシートを作成した研究協力員の感想を以下にまとめた（表3）。2つのシートの作成が、個別の指導計画作成に必要な視点を得ることにつながったことがわかる。

表3 両シートに入力した感想（一部抜粋）

<p>&lt;各教科等チェックシート&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・知的障害の児童生徒が各教科の何段階かを確認することに時間がかかったが、教科ごとに「目標・内容の一覧表」がワンクリックで閲覧でき、効率的かつ効果的に進めることができた。</li> <li>・知的障害がなくても、教科（特に算数・数学や社会、理科等）によって、1学年下、2学年下の内容の方が適当かどうか確認できた。</li> </ul> <p>&lt;自立活動フローシート&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実態を把握する際、自立活動の6区分で全体像を捉えることで児童生徒の困難さだけでなく、得意なことなどにも気付くことができ、そのことで目標設定に変化が現れた。</li> <li>・今まで行っていた指導・支援している内容について、自立活動の視点で整理し直すことができ、このことで指導の重点化を図り、どの指導場面で適切な指導・支援を行うか、具体的な検討をすることができた。</li> </ul>
--

## (2) カリキュラム・マネジメントの充実に向けて

本研究における、各教科等チェックシート並びに自立活動フローシートの活用により、どのように実態を捉え、なぜこの目標を設定したのか、どうして目標に違いが生じるのか、その原因を教員間で考えながら、実態について協議することで、目標について焦点化することができた。さらに、指導を進めながら児童生徒の実態を捉え直し、次の指導内容等を検討するという、一連の計画・実施・評価・改善のサイクルの重要性を改めて実感することができる有効なシートになったと考える。2つのシートの活用により、実態把握から目標設定までのプロセスをより明確にすることができた。

さらに、2つのシートは、個別の指導計画の作成・改善に向けた検討会や、学習指導案作成の資料としても利用できるなど、一年間をとおして活用できるという成果が得られており、本シートの活用法については以下のとおり、一連の計画・実施・評価・改善のあらゆる場面での有用性が示された（図4）。

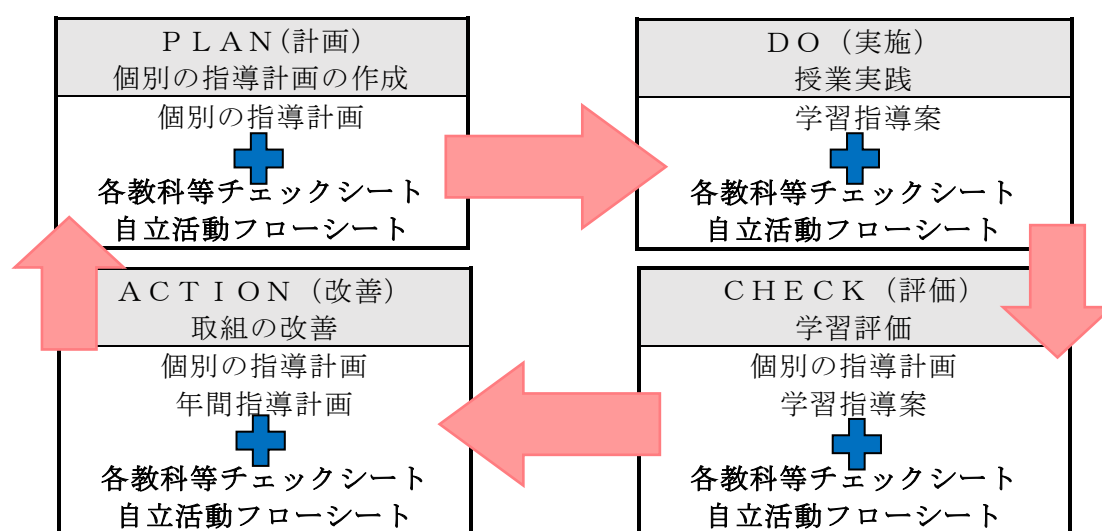


図4 計画・実施・評価・改善の各場面での両シートの活用法（案）

## 7 今後に向けて

特別支援学校においてカリキュラム・マネジメントを展開していくためには、「個別の指導計画作成の手続きが適切かどうかを考えること」「前年度までの学びの履歴をいかに次年度につなげていくのか、学習上や生活上の困難さを把握した上で自立活動と各教科等についての手続きの違いを理解しながら、目標設定を行っているのかを問い直すこと」が必要である。

これからの特別支援学校の教員に求められる専門性とは、「なぜ今回の指導目標・内容を設定したのか、そこに至るプロセスを示す」という根拠に基づいた個別の指導計画を作成し、授業を実践する力である。この研究をとおして、より客観性のある根拠に基づいた個別の指導計画を作成できることが示されたことで、各校で研究成果を共有し、積極的にこのシートを活用した実践を推進してほしい。

また、今後は、開発した2つのシートと各校の取組、またシートを使った効果について、県総合教育センターのWebページへ掲載し、教員への周知を図っていきたい。